

乱曲《東国下》小考

——『東関紀行』との関わりを中心に——

中野 顕 正

乱曲中の大作「三曲」の一つ《東国下》は、源平合戦で捕虜となった平盛久が鎌倉へと護送される道中を描く、道行文体による謡い物の古曲である。本曲は、南北朝期の地下遁世者・玉林が、主人足利義満の勘気を受けて東国へ下っていた折に執筆したものといひ(申樂談儀)、その詞章には紀行文学や早歌・軍記等における道行文の類型が利用されている。

本稿では、その中でも『東関紀行』が直接参照されていたと推測する。同書は、仁治三年(一四四二)に都から鎌倉へと旅をした或る人物による紀行文で、読み本系『平家物語』の師長配流譚等にもその影響が見える。同書を参照していたと推測する根拠は、以下の二点である。

第一は、『東国下』の菊川・大井川間(現在の静岡県牧之原市付近)に見える「駒場原」は歴史史料や紀行文学等の他書に見えない地名だが、唯一『東関紀行』に「こまは書陵部本等」／「こはま(群書類従本等)／「こはま(正保版本等)」なる地名が見えている点。

第二は、『東国下』の浮島原(現在の静岡県

富士市周辺)の描写に「左は湖水波寄せて、りようはせんすいの浮鳥の、上毛の霜をうち払ふ、右は蒼海幽かにて、漁村の孤帆遙かなり」と見える点。このうち「漁村の孤帆」は瀟湘八景の「遠浦帰帆」「漁村夕照」を踏まえた表現と考えられ、また「りようはせんすい」は現行詞章等の「芦花浅水」(『三体詩』所収の司空曙「江村即事」に由来)が正しい。それゆえこの箇所は、『三体詩』や瀟湘八景の表現を借りる形で、進行方向左手(北側)に浮島沼の芦と水鳥、右手(南側)に駿河湾の漁舟を配したものと

いえるが、これは『東関紀行』の「北は……芦刈小舟所々に棹さして、群れたる鳥多く去り来たり。南は……わづかに遠帆の空に連なれるを望む」に対応する。『三体詩』や瀟湘八景は当時の五山文学において重要視されていたもので、当該場面はこうした五山の美意識のもとに『東関紀行』の情景を翻案したものと考えられる。作詞者の玉林が二条良基周辺で活動する連歌師でもあった(*1)ことと、良基周辺では和漢聯句がしばしば興行され、和

歌・連歌的表現と五山文学的表現とが交流・交錯する環境が存在していたことを考慮すれば、当該場面の表現はそうした玉林の重層的な文芸基盤に裏付けられたものと言えようか。以上から、『東国下』の依拠資料の一つに『東関紀行』があったと推測されるのである。

ところで、一般に曲舞謡では末尾の文言が冒頭にも「次第」として謡われ、その作品の主題として扱われるが、『東国下』末尾は「雪の古枝の枯れてだに、再び花や咲くらん」であり、死地に赴く盛久の心境が春の到来を願う冬枯れの木に擬えられている。

従来、能(盛久)や長門本『平家物語』等に見える盛久観音利生譚(*2)との関わりから、この文言は「枯れたる草木も忽ちに、花咲き実なると説いたまふ」(梁塵秘抄39)と同趣の、千手観音の功德への言及と解されてきた。しかし本曲では、この文言は三島明神に救済を願う場面に位置し、観音への言及としては違和感がある。ここで『東関紀行』との関連性を考慮するとき、同書の伊豆三島社条に

この社は伊予国三島の大明神を移し奉ると聞くにも、能因入道、伊予守実綱が命によりて歌詠みて奉りけるに、炎旱の天より雨俄に降りて、枯れたる稲葉も忽ちに緑に還りける、現人神の御名残なれば

として、炎旱で萎れていた稲葉が伊予三島社の神徳によつて生命力を恢復したとする説話

（諸書に見え著名の見える点が注意される。《東国下》が死地に赴く盛久の心境に対応して秋冬の季節を採用している点を考慮すれば、本曲の「雪の古枝の…」の文言は、炎旱を冬枯れへと翻案しつつこの説話を踏襲し、植物の生命力恢復に託して盛久の願いを表現したものと解されまいか。

ここで、この文言の直前に「南無や三島の明神、本地大通智勝仏」と見える点に注意したい。大通智勝仏とは『法華経』化城喻品に登場する過去仏で、在俗時に十六人の王子がおり、王子達もみな出家して後に仏となったという。伊豆三島社の本地をめぐっては、例えば早歌《三島詣》に「夫れ三島明神は、……本地医王の誓約、十二大願を願はず」「大通智勝のその昔、東方阿闍と聞こゆるも、コノ今の医王善逝かとよ」と見えるように、大通智勝仏の第一王子としての薬師仏（阿闍仏）が宛てられ、それは例えば『相州兵乱記』に「抑彼三嶋大明神ト申ハ、御本社ハ四国伊予国ニ御鎮座有。……本地大通智勝仏ニテ御座ス。……当社モ亦其神ノ御子トカヤ」とある如く、伊予三島社（本地は大通智勝仏）の御子神であるとの理解に基づくらしい*3。それゆえ《東国下》で「本地大通智勝仏」と謡われるのは、伊豆三島社の本社である伊予三島社の神徳に思いを馳せている表現と解され、この点からも、《東国下》は前掲説話に基づくと考えられるのである。

以上のように「雪の古枝の……」を観音では

なく三島社の功德と解するとき、本曲が盛久観音利生譚を前提としていたかは怪しくなる。本曲の前提に観音利生譚が存在しなかった場合、盛久自身は実在の人物であり*4、本曲で「刑戮に近き我が身」とあるように、鎌倉へ護送されたとの伝承が本曲以前に存在していたことは確実ながら、それと観音利生譚とが結びつけられたのは本曲の明らかな影響下にある能《盛久》が最初で、長門本『平家物語』は能からの逆輸入ということになる*5。長門本と極めて近い関係にある延慶本が盛久観音利生譚を載せず、代わりにほぼ同内容の説話を平貞能の話として載せている点も注意されよう。可能性として、《東国下》の段階では

未だ盛久観音利生譚は存在せず、《盛久》に至って《東国下》の盛久護送譚を踏まえつつ平貞能観音利生譚を平盛久の話として翻案し、それを長門本等が取り入れた、と考えることも不可能ではない。《盛久》では季節が春に設定され、「命は千秋、万歳の春を祝ふぞと」（9：ロンギ）とあるようにそれは生き存えた盛久の命の象徴と解されるが、これは春を願う冬木に身の逼塞を重ねる「雪の古枝の……」の文言に呼応する形での季節の改変と言え、《盛久》はこの文言に着想を得て一曲を構想したものと考えられる。とすれば、仮に《盛久》以前に盛久観音利生譚が存在せずとも、作品構想の過程で「雪の古枝の……」の文言と前掲『梁塵秘抄』等との類似性から清水寺を信仰する身に起こった奇跡」という話を構想し、延慶本と

同根の平貞能観音利生譚を取り入れて翻案することは可能であったろう。《盛久》の作者・観世元雅が必ずしも本説至上主義に拘らない人物であったことも、併せて考えるべき問題である。

但し、盛久の周辺に清水寺と深く関わる人物がいたとの伝承が存在する*6ことを含め、この盛久説話の形成過程についてはなお検討を要しよう。本稿は、その一つの可能性を提示したに過ぎない。

*1 竹本幹夫「琳阿考」（『観阿弥・世阿弥時代の能楽』明治書院、一九九九年。初出一九七六年）。

*2 盛久観音利生譚の収録文献については田口和夫「盛久説話の系譜」（麻原美子・大井善壽編『長門本平家物語の総合研究』三、勉誠出版、二〇〇〇年）に詳しい。なお竹本幹夫「盛久の周辺」（『鍊仙』二二七・二二三八、一九七五年）が紹介する『平家物語秘伝書』所収「盛久之事」は、伊藤正義「各曲解題 盛久」（『新潮日本古典集成』下、新潮社、一九八八年）が指摘するように能《盛久》の影響下に成立した可能性が考えられ、本稿では殊更に取り上げることとはしなかった。

*3 伊豆三島社の本地をめぐる言説は『予章記』・『諸神本懐集』・『真名本』・『曾我物語』・『平家打聞』等に見える。また伊予三島社における大通智勝仏信仰につ

いては武田和昭「伊予における大通智勝
仏の展開——四国遍路と現存像を中心
として」(落合博志編『中四国諸寺院Ⅰ』
寺院文献資料学の新展開5、臨川書店、
二〇二〇年)に詳しい。

*4 角田文衛『平家後抄』上(朝日出版社、一九
八一年)一三三頁参照。

*5 長門本の成立時期をめぐっては、室町期
に降るとする島津忠夫「長門本平家物
語の一考察」(『平家物語試論』汲古書
院、一九九七年。初出一九九二年)など
の説が注意され、同本の享受の痕跡が
近世初期まで現れないとの松尾葦江「長
門本平家物語伝本に関する基礎的研究」
(『平家物語論究』明治書院、一九八五
年)の指摘も示唆的である。また、同
本の盛久譚がもつ後代性を指摘したも
のとして川鶴進「長門本『平家物語』の
盛久観音利生譚をめぐって」(梶原正
昭編『軍記文学の系譜と展開』汲古書院、
一九九八年)がある。

*6 落合博志「所見曲に関するいくつかの問
題」(『能と狂言』一、二〇〇三年)参照。

引用資料の出典は以下の通り。《東国下》…日本思想
大系『世阿弥・禅竹』所収「五音」／《盛久》…日本古典
文学大系／『東関紀行』『梁塵秘抄』…新日本古典文学
大系／早歌…中世の文学／『相州兵乱記』…群書類従。
但し引用に際しては適宜表記を改めた。なお、本稿は
JSPS 科研費 JP20K21997 に基づく研究成果の一部である。

(日本女子大学学術研究員)